



発達心理学者の子育て奮戦記 (7)

北風と太陽

長田 瑞恵

若返りの源

息子が三か月になった日から、私は職場に復帰しました。まだ首も据わっていない息子を保育園に預けることには多少の迷いもありましたが、娘の通う保育園にお願いできることになり、思い切って復帰することにしましたのです。

職場復帰してから、周囲の人々に言われることが

あります。それは、出産を終えて、私が元気になった、若返ったということです。しかし、日中は目の回る忙しさのうえ、授乳のために睡眠が充分にとれない毎日です。本人には、元気になったという自覚が全くありません。ただ、もし出産前よりも今のほうが元気になっているとすれば、それは出産から今の生活に至るまでの中で、息子が私に与えてくれているもののおかげだと思えます。

女性は妊娠から出産、授乳に至るまで、劇的なホルモンの変化を経験します。そのために、人によっては体の不調を感じる場合もありますが、私のようにかえって体調がよくなり、元気になることもあるようです。また、息子がそばにいることで感じる安らぎや、頼りにされているという責任感、求められているという充実感が、私に力を与えてくれます。温かく、少し湿っぽい重さを腕の中に感じながら眠る時間は、たとえそれが非常に短い時間であっても、とても心安らぐものです。

二人目の余裕

息子を妊娠中に、先輩の女性研究者から「二人目のほうが育児を楽しめる」と言われたことがあります。しかし、第一子の娘のときもバタバタしつつも、それなりに子育てを楽しんでいたように感じていたので、先輩の言葉は当初あまりしっくりきませ

んでした。

ところが、息子が誕生し、息子と過ごす生活が始まると、先輩の言葉が実感として納得できるようになってきました。なぜなら、授乳、おむつ替え、入浴、寝かしつけ、子どもを連れた外出、どれをとっても、どうして娘のときにはあんなに大変に感じていたのだろうと不思議に思うくらい、息子の世話は楽なのです。

たとえば、娘のときには娘が泣きだすといちいち「どうして泣いているのだろう？ おむつが気持ち悪いのかな？ おなかが減っているのかな？ それとも……？」とあたふたとしてしまっていました。

娘は何をしてもなかなか泣きやまない、かんの虫の時期が長かったので、いっそう大変に感じていたのかもしれない。それが、息子の場合には「そろそろおむつだろう」「おなかが減ったのだろう」「眠いのだな」などと、泣いている理由の推測が割合簡単

につくのです。

入浴にしても、娘のときには「耳に水が入らないように」「落とさないように」「洗い残しがないように」などとあらゆることに気を使っていたため、大仕事に感じていました。それが、息子の場合には、入浴のための一連の動作をスムーズにできるようになってきているため、気持ちよさそうにしている息子を眺めながら、私も一息つけるほどです。

万事が万事、娘のときよりも、息子のほうが楽なのです。母子関係に関する研究からも、一般的には第一子よりも第二子のほうが扱いやすく感じる母親が多いと言われています。この違いの理由には娘と息子の性質の違いもあるかもしれませんが、娘が特別育てにくい気質だったわけではありません。どちらかといえば、娘はかんの虫を除けば、育てやすい穏やかな赤ちゃんだったと思います。むしろ、子どもの性質の違いというよりは、私自身が赤ちゃんの

世話一つひとつに慣れてきたために、子育ての手の抜きどころというか、力の抜きどころというようなものがわかってきたのだと思います。そして私の肩の力が抜けている分だけ、息子も緊張せずにおおらかに過ごし、ますます育てやすい性質になっていているのだと思います。

世話の一つひとつが楽に感じられる分、息子と共に過ごす時間の楽しさをじっくり味わう余裕が生まれてきました。娘のときにも子育ての楽しさに感嘆していましたが、すべてが初めて出合う経験だったために、楽しさをゆっくり味わう余裕はまだまだ少なかったように思います。それが今は、息子の世話をする楽しさをじっくりかみしめています。

そういう意味では、私は娘を育てていますが、私もまた娘によって母親へと育てられているのだと思います。娘と共に初めてばかりの経験をしているからこそ、私は子どもの世話に慣れ、子どもと過ごす

楽しさを教えてもらい、それを味わう余裕を育ててもらっているのだと思います。

自己中心

さて、二歳八か月になろうとしている娘は、私の妊娠中から赤ちゃん返りを始め、息子の誕生後もかなり激しく動揺し続けています。それでも、最近では弟の存在には少しづつ慣れてきたようです。保育園から帰宅すると真っ先に息子がどこにいるかを確かめ、見あたらないと「Hくん（息子の名前）はどこー？」と言つて探します。息子が泣きだすと、急いで「どうしたのー？」と声をかけ、そばに駆け寄り、おなかをポンポンと軽く叩いてなだめます。その姿は「小さなお母さん」といったところです。弟をとてをかわいがる一方で、娘の感じている喪失感にも似た複雑な思いは計り知れないものようです。息子が生まれるまでは、精神的にも物理的に

もすべてのものを独り占めしてきた娘です。それが今では、母親は弟の世話を優先し、自分だけのものだったベビーカーやおもちゃは、弟と共有のものになってしまいました。それでも機嫌のよいときには「お姉ちゃんのベビーカー、Hくんに貸してあげるねー」などとニコニコしていますが、ひとたび気分がこじれると「S（娘の名前）のベビーカー、貸してあげないー」と意固地になってしまいます。

中でも、娘の気分が一番こじれやすいのは、私が息子の授乳をしているときです。息子が泣き出すと「Hくん、おっぱいかもねー」と私を呼びに来るのですが、いざ、私が息子のもとへ行き授乳を始めるのと、途端に様子が変わります。「だっこー」とせがんでみたり、授乳している私のそばに寝ころんで指しゃぶりを始めたり、時にはぐすぐずと泣き始めたりします。娘の食事と息子の授乳が重なってしまおうものなら、娘はハンガーストライキを断行しま

す。ほかにも、いったん気分がこじれると、歯磨きや着替えなど、娘の生活上どうしても必要なことでも頑としてやろうとしなくなりません。電気コードをいじるなどの危険な行動を「やめてね」とやめさせようとすれば、意地になってその行動をやり続けます。すねているときには自分は呼ばれても返事をしないのに、父母が忙しいときに限って父母のことを呼び続け、生返事をしようものなら怒り出します。

母親の私にさんさん当たりちらした挙げ句に「お母ちゃんはいや！ お父ちゃんがいい！」と泣き出して、私がする世話の一切を拒否したりすることまであります。

このような娘の様子は、客観的に見れば「やきもち」「赤ちゃん返り」と理解できます。しかし、自分でできるはずのこともしようと思わず、あらゆる手を使って、ひたすら私の気を引こうとしている娘の姿に、私のほうも娘に寄り添う余裕を失って、きつ

く叱ってしまったては後で反省することが増えてきました。

児童期に入るまでの子どもの特徴の一つとして、スイスの心理学者ジャン・ピアジェ[※]は「自己中心性」を挙げ

ています。これは大人の自己中心とは異なり、この時期の子どもにはまだ客観的に判断する能力が備わっておらず、他者の視点をとったり、他者の立場になって考えたりすることができないのだと考えられています。赤ちゃん返りしている娘の行動も、まさにこの幼児の自己中心性を現しているものとも考えられます。娘の視点だけから考えれば、弟の誕生によって自分が奪われたものばかりが目につくでしょう。おなかを減らしてもおむつがぬれても、泣



いて訴えることしかできない弟の現状は理解できないでしょうし、決して娘をないがしろにしているわけではない父母の気持ちにも、まだまだ思い至らないのでしょうか。

時に、きつく叱ってしまつては反省を繰り返す未熟な母親の私ですが、それでもできるだけ娘の気持ちに共感したうえで、娘にいろいろなことを語りかけるようにしたいと思います。

「Sはいい子ね。お父さんもお母さんもSのことが大好きなのよ」

「Hくんはおなかが減つても、エンエンつて泣くしかできないのよ。だからお母さんがおっぱいをあげないとかわいそうなのよ」

優しく話しかけると、最初はすねてぐずぐずしていた娘も、だんだんと柔らかい表情に戻っていきます。娘の心を落ち着かせ、私の言葉をその心に届けるためには「北風と太陽」の寓話のとおり、北風の

ようにきつく叱るのではなく、太陽のように温かく包み込むことが大切なようです。

娘の私に対するきつい態度や自己中心的な振る舞いは、娘の経験している葛藤の表れだと思ひます。

そして、娘の世話に比べて息子の世話が楽に感じているように、後になって、今の娘の様子が笑い話の一つになつていく日が来るのだと思ひます。今は、娘の嵐に真正面から巻き込まれて、余裕を失つてしまふことのないように工夫しながら、太陽のように娘に寄り添つていきたいと思ひます。

(十文字学園女子大学 専門は認知発達)

主な著書「知識獲得過程についての理解の発達」

風間書房 二〇〇三年

※ピアジェの理論に関する参考書

斎藤法子・松井和男・内山昭・細井芳弘・伊藤靖祐

石川晴子／著 『ピアジェ理論による幼児教育』

明治図書出版 二〇〇二年